



ESSAY ~靈園に仙台ゆかりの 人をたずねて4~

宮地 房江 (1911~2010)

草木染の世界に、後半生のすべてを投じて



西大立目 祥子

草木染の技法を駆使しながら、大胆な構図と色彩で生命感あふれる世界を創り上げた宮地房江さん。その作品には、手仕事である草木染を芸術の極みへと高めた独特の力が宿っている。仙台市博物館のタペストリーや勝山館の壁画は、大きさと躍動感で見る者を圧倒する。しかも、代表作の多くは50歳代以降に製作されたものなのだ。歳を重ねるごとに新境地を開いていった宮地房江さんとは、いったいどんな方だったのだろう。

この稿のために年譜をひもといて、大阪生まれと知つて驚いた。作品に繰り返し表現される山や森、そもそも草木染の原料となる自生する植物が、東北のイメージと強く結びついていたからである。しかし、その生涯は幼い頃から不思議な因縁で仙台とつながっていた。

医師だった父の仕事のため仙台に転居したのは大正6年、6歳のとき。木町通小に入学し、その門前に暮らした。3年後には大阪に戻り、やがて日本女子大学政科へ進学、このとき染色と出会っているが染色家への道はまだ遠く、卒業後は東北大学医学部でカロチンの研究にいそしんだ時期もあった。仙台との結びつきを決定づけたのは、東北大学に勤務する放射線科の医師、宮地韶太郎との結婚だった。約5年の仙台暮らしの中で長女が誕生、その後ハルピン、弘前と移り住み、終戦後の混乱期も仙台で過ごしている。この間、染色への関心は少しずつ深まっていたものと思われる。

西大立目 祥子(にしおおたちめ・しょうこ)

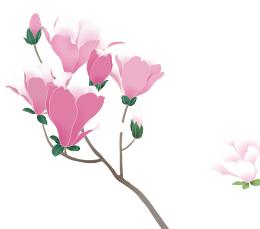
フリーライター。地元学の視点で仙台のまちや広瀬川について執筆している。著書に『仙台まち歩き』(河北新報出版センター)。

主婦として家庭を守っていた宮地さんを染色の道へと突き進ませたのは、皮肉にも夫の突然の死だった。昭和29年、夫の赴任にともない家族で転居した長崎から、宮地さんはわずか1年で仙台に舞い戻ってくる。長崎には「もう二度と訪れまいとさえ思った」ほどの大きな悲しみを胸に3人の子を連れて。そして、自宅に料理と染色の教室を開いてがむしゃらに働き始めた。42歳だった。

「長崎に行く前の年に、仙台で染色グループ『仙房会』を主宰しており、そうした人たちとのつながりの中での決心だったんでしょう」と話すのは、当時中学生だった長男の秀夫さんだ。

才能は、覚悟を決めてこそ開花するものなのかもしれない。昭和33年、宮城学院女子大学の教授となった宮地さんは、教職のかたわら製作に打ち込み、数々の公募展の常連となっていく。まわりには、ひたむきで明るい人柄に惹かれ、たくさんの女性たちが集まるようになった。大作に挑むために構えた工房には笑い声が絶えなかつたようだ。その頃に発想が変わったようで急に表現が大胆になり、作風は具象から抽象へと転じ、昭和52年のスイス美術展、サロン・ドートンヌへの出品を皮切りに外国の展覧会へ参加も増えていった。

製作への意欲は衰えを知らず、70歳代、80歳代になつても製作は夜が多く、深夜まで自宅工房で蟻を炊いていたという。秀夫さんの母の記憶は蟻の匂いとともににある。享年99歳。困難を表現の力に変えた人だった。



生涯を通して純粋な好奇心を失うことがなかった。墓碑は12区。

